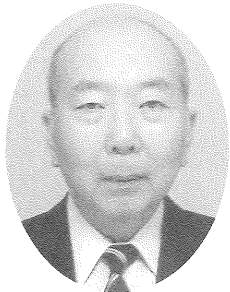


# 剣風



事務局 〒330-0074  
さいたま市浦和区北浦和5-6-5  
浦和合同庁舎4階  
Tel (048)834-8869  
Fax (048)834-8879  
<http://www.saitama-kendo.or.jp>  
(編集責任者 豊嶋正夫)

第8号 平成27(2015)年7月4日発行 (題字 野澤 治雄 前会長)



## “あいさつ”

公益財団法人 埼玉県剣道連盟 会長 豊嶋 正夫

このたび、前野澤治雄会長の跡を受け会長に就任いたしました。この機会に、抱負の一端を述べさせていただきたいと思っております。

埼剣連60年余の実績に、新たに何を付け加えるべきかを考えるとき、普及と強化両面から、つまり、“裾野は限りなく広く、頂きはより高く”と組織の拡充を図る上で

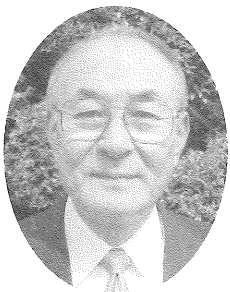
の具体的施策が欠かせません。

基本的には、4部会 {①総務、②公1 (講習会・審査会・県内大会等)、③公2 (選手育成強化全般)、④広報} の事業内容の鋭意見直しと意欲的推進を図る中で、加盟団体振興の中核をなし、埼剣連を下から押し上げる少年剣道育成強化への取り組みや、講習・研修内容の再点検と、講話・安全管理面の充実、対外的選手強化の計画的実施、広報・研究活動面の拡充等挙げられます。

その方策として、理事全員を4部会に配置し、各部会の英知を結集した「課題と展望」として整理し、新規実施項目を含めた重点的事項を明らかにし、次代の活路を拓くことに繋げ前進を続けたいと考えます。

本連盟が、全国に先駆けて公益財団法人に移行して4年、そのめざすところは、礼節の基盤にある剣道に誇りをもって地域に浸透させ、社会的信頼を不動のものとして普及を図るところにあります。そのため組織一丸となって事業を推進することが大切であり、真にその大義は、剣道理念の根幹を成す精神を支えとして、この点から、いささかも外れることのない確固たる歩み続けることにあります。

これらを含め、会員各位の更なる自覚と力強いご支援ご協力をお願いし、あいさつといたします。



## “退任の挨拶”

公益財団法人 埼玉県剣道連盟 前会長 野澤 治雄

去る6月6日に開催された総会におきまして、埼玉県剣道連盟の会長を退任することになりました。誠に世話になり、ありがとうございました。

在任中は剣道人口の底辺拡大をスローガンに二期四年間、皆様のご協力をいただきながら何とか、任務を全うすることができました。

現在中学校では、武道が必修科目となり剣道が一目おかれています。剣道部活動外部指導者の先生方も、各大会で活躍されている報告を耳にし、剣道の隆盛を祈っています。

もう一つの目標として役員の増員を図りましたが、将来の為に良い結果をもたらしてくれるものと、確信しております。

新しい会長には、豊嶋正夫氏が選出されました。又、増員となった理事の中から、新たに選任された方その他、多くの方に再任を頂き誠に有難う御座いました。会長始め役員の皆様は知識、経験共に豊富で優れた方々でございますので埼玉県剣道連盟は盤石であります。

埼剣連は、世界に通じる選手の育成とともに、「剣心一如」心の修行、又健康増進と生涯スポーツとして楽しむ剣道であって欲しいと思っています。

再度のお願いですが、剣道人口の拡充等各支部の会員の皆様のご協力を頂き、埼玉県剣道連盟が充実発展されることと、皆様のご健勝ご多幸をご祈念申し上げまして、退任の挨拶とさせていただきます。

平成27・28年度 公益財団法人 埼玉県剣道連盟役員 (順不同)

名誉会長	大久保和政	相談役	水野 仁・野澤 治雄	顧問	鋪野 猷爾・茂木 廣次
会長	豊嶋 正夫(浦和)				
副会長	◎山中 茂樹(加須)	◎栗原 憲一(狭山)	◎奥田 昌利(蕨)	◎関口 善行(深谷)	
専務理事	◎佐藤 義則(浦和)				
理事	増田 吉男(草加)	矢部 勇介(越谷)	片山 剛(春日部)	◎戸賀崎正道(久喜)	
	齋藤 茂樹(加須)	島崎 隆男(所沢)	吉野 英明(東入間)	尾崎 勝美(川越)	
	藤牧 守芳(飯能)	伊田登喜三郎(東松山)	小倉順二郎(川口)	内田 明(朝霞)	
	中村 好一(大宮)	林 貞次(上尾)	河野喜八郎(鴻巣)	田中 宏明(北本)	
	鶴間 信好(熊谷)	浅見 真一(秩父)	大澤 規男(警察)	原 義克(高校)	
	佐藤 忍(居合道)	瀧澤 利行(杖道)	宮下 達也(北本)		
監事	會田 紳次(浦和)	柳澤 昌秀(上尾)			
評議員	山田 守男(草加)	中村 豊孝(八潮)	小川 俊文(越谷)	増田啓三郎(吉川)	
	伊藤 徳男(春日部)	横山 久夫(杉戸)	甲田 侃(久喜)	菊地 一男(幸手)	
	千葉 達也(加須)	秋谷 庫治(羽生)	加藤 輝男(行田)	荒井 信義(所沢)	
	津野 眞生(東入間)	松井晴太郎(狭山)	石橋 光好(入間)	大久保勝示(川越)	
	大釜鉄太郎(飯能)	石井 利幸(西入間)	長峰 一雄(東松山)	中嶋 秀雄(小川)	
	齋藤 俊博(川口)	水島 繁(蕨)	上野 勇仁(戸田)	千葉 光三(朝霞)	
	吉田 聰(浦和)	西脇 民雄(大宮)	田中 章(上尾)	上野 義光(鴻巣)	
	柳瀬 浩美(北本)	小島 康夫(熊谷)	小久保 博(深谷)	清水都留吉(寄居)	
	菰塚 雅司(本庄)	岩田 信行(秩父)	日野原 進(小鹿野)	関口 啓一(警察)	
	坂井 順司(高校)	穂田 清(大学)	村田 健(居合道)	齋藤 力夫(杖道)	

(審議員長 根岸 一雄・強化委員長 神山 芳男)

◎業務執行理事

「大会記録この1年」(2015前期) 全国・関東大会入賞、県予選会結果(報告)

順不同

——全国大会——

- ◎全日本高齢者武道大会(6・8)
  - ・個人65~69歳 ②桜中正志(杉戸)
  - ・個人70~74歳 ②渡辺秀男(東松山)
  - ③小川博孝(行田)
  - ・個人75~79歳 ②川下紘生(久喜)

——関東大会——

- ◎関東高校剣道大会(6・5~7)
  - ・男子団体 優勝 埼玉栄高校
  - ・女子団体 3位 本庄第一高校
  - ・男子個人 3位 中澤志音(城北埼玉高)

——全国大会予選——

- ◎第63回都道府県対抗優勝大会県予選(2・1)
  - 先鋒 元吉雄弥(埼玉栄) 次鋒 泉 和毅(北本)
  - 五将 矢口二三也(川越) 中堅 植竹倅希(幸手)
  - 三将 嶋田貴文(警察) 副将 内田貢一(東松山)
  - 大将 金田孝行(警察)
  - ※先鋒は高校大会で決定
- ◎第28回健康福祉祭剣道交流会県予選(4・12)
  - 先鋒 永松教孝(越谷) 次鋒 森谷敏次(久喜)
  - 中堅 久保和秀(西入間) 副将 島村 勉(羽生)
  - 大将 渡辺秀男(東松山)
- ◎第7回都道府県対抗女子剣道優勝大会県予選(4・12)
  - 先鋒 河嶋香菜子(本庄第一) 次鋒 馬渡文絵(大学)
  - 中堅 荒井貴子(久喜) 副将 村山千夏(警察)
  - 大将 内野尚美(所沢)
  - ※先鋒は高校関東大会予選で決定
- ◎国民体育大会県予選(5・23)
  - ・成年男子
  - 先鋒 足立柳次(警察) 次鋒 本間将光(警察)

- 中堅 米屋勇一(警察) 副将 井口 清(警察)
- 大将 上野光弘(警察)
- ・成年女子
- 先鋒 高橋佳菜子(警察) 中堅 荒井貴子(久喜)
- 大将 村山千夏(警察)
- ◎全国教職員剣道大会予選会
  - ・男子
  - 木野内悠介(鴻巣吹上小) 中山直樹(本庄東中)
  - 齊藤洋平(伊奈学園高) 金子信昭(白岡高)
  - 吉長英二(市立浦和高)
  - ・女子
  - 荒井貴子(蓮田南中)
- ◎全国高校総体予選会
  - ・男子団体①埼玉栄②本庄第一③大宮東③城北埼玉
  - ・女子団体①本庄第一②埼玉栄③伊奈総合③淑徳与野
  - ・男子個人①元吉雄弥(埼玉栄)②曾田峻平(本庄第一)
  - ・女子個人①嶋田莉子(本庄第一)②安井飛鳥(淑徳与野)

——関東大会予選——

- ◎関東高校剣道大会予選
  - ・男子団体出場校(7校)(4・25)
    - ①埼玉栄 ②本庄第一 ③大宮東 ④熊谷
    - ⑤立教新座 ⑥城北埼玉 ⑦春日部
  - ・女子団体出場校(7校)(4・26)
    - ①本庄第一 ②淑徳与野 ③伊奈学園総合
    - ④ふじみ野 ⑤埼玉栄 ⑥東京農大三 ⑦川口総合
  - ・男子個人(5・2)
    - ①元吉雄弥(埼玉栄) ②中澤志音(城北埼玉)
    - ③中村圭佑(埼玉栄) ③森川裕貴(立教新座)
  - ・女子個人(5・2)
    - ①河嶋香菜子(本庄第一) ②澤島 凜(埼玉栄)
    - ③宮崎江里子(埼玉栄) ③菱沼日捺子(淑徳与野)

## 『関東高校男子団体に優勝を遂げて』

6月5日～7日に千葉ポートアリーナで開催された第62回関東高等学校剣道大会に、おかげさまで優勝することができました。これも埼玉剣道連盟の皆様をはじめ高体連・中体連剣道専門部の先生方のご支援をいただいたからであると深く感謝申し上げます。

予選リーグのみの大会2日目は、試合前も含めて初戦の入り方に気を使いました。「慎重になり過ぎず、機会をつくってから打つ」という姿勢のもと、初戦は4-1、次戦は体もほぐれ、中堅が終わった時点で2-0という展開でしたが、ここから甘さがでて、最終的には2-2の引き分けになってしまいました。代表決定戦で辛くもリーグ突破はしましたが、気持ちの面で課題を残しました。3日目の最終日、いやな形で前日を終わっていましたので、初戦の入り方を「気を張り過ぎても自然体ではなくるので、いつもの地稽古のつもりで」とリラックスさせるよう特に心掛けました。それが功を奏したのか、前日とは違って伸び伸びと試合を展開し、東京の郁文館に3-0、茨城の水戸戸陵に1-0、準決勝では東京の高輪に1-0と勝利することができました。チームとしても各ポジションにしても、各自が役割を粘り強くこなし、まとまってきたように感じました。その結果、18年振りの決勝進出を果たし、茨城1位の土浦湖北

### 埼玉栄高等学校男子剣道部監督 蒔田 正人

に代表決定戦までもつれつつも勝つことができました。打つ前の機会を、竹刀と足を使って作って打ち切るという課題を実践できたと思います。埼玉県勢としては25年振り、本校としては初優勝になり多くの卒業生の皆様にも喜んでいただけたと思います。

また6月14日に行われましたインターハイ埼玉県予選においても優勝することができました。関東大会優勝の1週間後ということもあり、私も選手達もいろいろと悩み苦しんだ重圧の中の戦いでした。そういった困難をチーム全体で跳ね返すくらいの力が苦しさの中から身に付いたように今は思います。

8月3日～6日に和歌山県で開催されますインターハイでは、埼玉県の代表として頑張りたいと思います。

選手：元吉 雄弥（3年）  
鈴木 拓海（3年）  
中村 圭佑（3年）  
伯耆田 智哉（3年）  
設楽 海斗（2年）  
端 猛法（2年）  
遠藤 颯（2年）  
元井 大和（2年）



## 第37回全国スポーツ少年団剣道交流大会を顧みて

### 埼玉県スポーツ少年団剣道部会長 増田 吉男（大会実行委員、大会運営委員・競技部会長）

第37回全国スポーツ少年団剣道交流大会が主催、(公財)日本体育協会日本スポーツ少年団、全日本剣道連盟、(公財)埼玉県体育協会埼玉県スポーツ少年団、(公財)埼玉県剣道連盟、主管第37回全国スポーツ少年団埼玉県実行委員会により、埼玉県立武道館に於いて3月27～29日の3日間に亘り開催されました。参加人員は、各都道府県代表、団体戦48チーム(小学生5人制)・個人戦96名(中学男子48名、中学女子48名)の選手及び監督48名の合計384名。随所に各県代表選手の白熱した試合が展開されました。

開催にあたっては、(公財)埼玉県剣道連盟会長 野澤治雄様はじめ役員の方々や審判員の皆様方、埼玉県立武道館、埼玉県中学校体育連盟剣道専門部、上尾市立上尾中学校吹奏楽部の皆さんのご指導、ご協力を賜りました。本大会の成功は皆様方によるものと心より感謝申し上げます。また、大澤規男先生の団員基本錬成と合同稽古会、埼玉県スポーツ少年団リーダー会の交歓交流会は、参加選手の思い出に残ったことと思います。

本県選手は、団体戦に埼玉県Aチーム(秩父市)、Bチーム(蓮田市)、個人戦男子、竹内快(小鹿野剣友会)・高山聡大(上里剣道)、個人戦女子、関根加奈子(宮代剣友会)・石川万尋(霞剣友会)が出場しました。団体戦も個人戦も、素晴らしい戦いを展開いたしましたが残念ながら決勝トーナメントに勝ちあがることはできませんでした。しかし、「木刀による剣道基本技稽古法」では、子どもたち16名が気迫の籠った演武を披露し、全日本剣道連盟副会長兼専務理事福本修二先生からお誉めの言葉を戴きました。

本大会の開催を受け、県スポーツ少年団本部では、第37回全国スポーツ少年団埼玉県実行委員会設立に向けて、平成25年7月に準備委員会組織を設けました。準備委員会では、総務部会・式典交流部会・競技部会の3部会を設け、スポーツ少年団本部員11名並びにスポーツ少年団剣道部会員12名で準備を開始しました。

平成26年3月には、第36回石川県大会を各部会代表により視察を行いました。まさしく「百聞は一見にしかず」でした。各部会は、視察報告書に基づき、数十項目の業務実施表の再検証を行い、業務内容をより具体的かつ明確化する



ことが出来ました。

平成26年10月に第37回全国スポーツ少年団埼玉県実行委員会が設立され、佐藤高弘実行委員長から「お・も・て・な・し」をモットーに全ての人々が心に残る大会になるよう、全力で大会運営に当ることを確認し合いました。各部会は、準備委員会同様に、下部組織の運営委員会内に人員補強を行い、継続して大会準備を進め、それぞれ20回以上のC(コミュニケーション)、P(プラン)、C(チェック)会議を重ね共通理解を図っています。平成26年12月には、武道館で第37回全国大会予選会(プレ全国大会)を開催してD(ドー)、C(チェック)を行いました。結果、反省点を詳細に抽出し、解決策を検討しました。部会間では、10回以上の会議を開催し、連絡調整、意思疎通、業務分担の明確化を図りました。

最終的には、各業務・運営マニュアルと大会準備、実施中の全ての役員・係員・補助員一人ひとりのタイム・スケジュールを完成することが出来ました。

本部員の方は、剣道を経験したことのない方が殆どでしたが、他種目での全国大会規模の大会運営を経験した方が多く、競技以外の業務を積極的に進めて戴きました。

また、試合場運営では、27日の開会式終了後、東西南北ブロック代表の試合場役員・補助員が集まり、約2時間以上に亘り、試合シミュレーションに基づく掲示、記録等の練習を行いました。さらに、「木刀による剣道基本技稽古法」の演武も、演武者と引率保護者の協力で8回の稽古を実施することが出来ました。

本部員13名、リーダー会18名、剣道部会の指導者・保護者37名、団員32名、演武者16名と引率して頂いた保護者、事務局3名の役員・係員等の全ての人々にお礼と感謝を申し上げますと共に、円滑に会議の設定をして頂いた、大会事務局の阿部課長のお陰と感謝いたします。

埼玉県スポーツ少年団剣道部会は「剣道の理念」「スポーツ少年団の理念」に基づき、三位一体(団員・保護者。指導者)で48団体、指導者604人、団員1221人で活動しています。県大会は、団員の減少に伴い団体戦を3人制、個人戦も取り入れて多くの子どもたちが参加出来るように配慮しています。第38回全国大会は、鹿児島県で開催されます。この大会でもよい成績が取れますように全加盟団体が切磋琢磨してまいります。

# 「我が師を語る」—南<sup>わたる</sup> 済先生と埼玉県立秩父農工高等学校剣道部—

剣道 教士七段 青葉 元由紀 (昭和33年度卒業)

恩師南 済先生 (保健体育) とは不思議な出会いであった。昭和30年4月、夢と希望を胸に膨らませ県内でも歴史のある県立秩父農工高等学校工業科に入学した。校則で運動部に入らなければならないことから経験のある卓球部に入部したが、毎日先輩の練習の球拾いだった。1学期末のある日、ピンポン球が隣の剣道場の玄関先まで飛び出したのを拾いに行ったところ、丁度剣道部の稽古中であった。

その稽古も相当激しいものでしばらく立ち止まって見ていたところ、道場の隅から私服で強そうな先生が私に近寄り「君は剣道に興味があるかね。」と尋ねられたので、「ハイ、あります。」と答えたところ「オ

ー、チェック、チェック」と言いながら小さな鉛筆をナメナメ私の名前を書きながら、「卓球部の先生に話しておくから明日から道場に来なさい。」と言われ、こうして師とはピンポン球の不思議な縁で出会いがあり、ここから私の長い剣道人生が始まりました。

始めは防具がないため防具置場にあった撓=シナイ競技の防具を着けての稽古であり、当時の剣道部は主将が野澤治雄 (範士) で、部員には同科の同級生根岸一雄 (範士)、井上静男 (長瀬修心館々長) がいて他13名で構成されていた。稽古内容は切り返し、掛かり稽古、試合練習等が主で、あるとき師は「青葉、君は打つとき竹刀を担ぐ癖があるから皆と逆の構え方で稽古をしては…」と言われ、何週間かやってみたが仲間からやりづらいと敬遠され元に戻したことがあった。

師はいつもこわい顔をしていたが温かみのある先生で何か褒める事があると、どんな些細なことでも小さな手帳に「オー、チェック、チェック」と笑いながらメモをするので、生徒からは「チェック先生」と親しまれていた。

卒業時に「卒業して剣道を止めてしまうのは勿体ない。地元で剣道ができる就職は困難だから警察に入ったらどうか。」と勧められた。当時は不景気で就職も困難な時代で、学校から集団で近県の警察を受験し、私は最後の埼玉県警察に合格することができた。以来42年間の奉職のうち38年間剣道のできる職場で仕事できたこと等、私たちに目先のことでなく真に剣道を通じての「人間形成の基礎」を創っていただいたことを恩師に今でも感謝しております。

## ☆同窓のOBからの一言

・恩師である南 済先生の「之が修業だよ。」の一言が私の進路を教えてくださいました。

高校生時に元旦に早朝稽古の計画がありまして、午前5時からの稽古に竹馬の友である (小学、中学、高校と同級生) 青葉君と20数キロの激寒の夜道を歩いて参加しました。師は道場玄関先にて出迎えてくれましたが、稽古修了後は「之が修業だよ。」の一言でした。

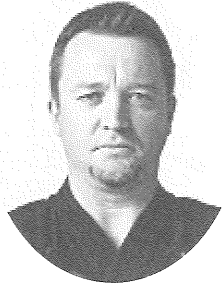
また師とは、昭和39年に東京で開催される七段審査会のため上京、都内に居住中の我家に前泊され、近くの道場で稽古、夜は剣道談話に聞き入ったのが最後になりましたが、そのことが今でも鮮明に思い出されます。  
(昭和33年卒 井上静雄氏)

・剣聖高野佐三郎先生の門下生となり修業された恩師南 済先生の指導を受けることができたのは僅か3年間でしたが私の自慢とするところです。師の指導は常に「守、破、離」の「守」であった。稽古は切り返し、打ち込み、掛かり稽古、試合練習というごく普通のパターンでしたが、特に初心者の指導が上手でした。試合練習では、師は一人審判でグローブのような手で、左右に動きながら下位者の有効技を拾って、少々一本に足りない技であっても無心の技を見極め、「ヨシ」と言って判定なされ、その時のコメントがユニークでやる気を出させる愛情のこもったものでした。恩師のご指導を受ける機会を得たことは大変ありがたく貴重な体験でした。  
(昭和35年卒 江田篤弘氏)



前列中央 南 済先生、その左隣野澤治雄主将、後列左から3番目 井上静男、後列右から2番目根岸一雄、右隣青葉元由紀 (昭和30年・秩父農工剣道場にて)

# 『葉隠』と捨て身



関西大学国際学部教授 教士七段 アレキサンダー・ベネット  
(Alexander Bennett Ph.D.)  
(第16回世界剣道選手権大会 ニュージーランドチーム監督)

私は最近、佐賀藩の侍が18世紀初期に武士道について書いた古典論文である『葉隠』の英訳版を出版した。『葉隠』の英知はしばしば甚だしく誤解されるものの、太平の世における厳しくもそれ以上に平和な侍の暮らしの艱難辛苦を知る上で素晴らしい情報源である。『葉隠』が完成したのは1716年で、その頃、武芸は形式、目的、哲学、原理において著しい変化を遂げていた。大部分の人にとって戦での勝利は遙か遠くの記憶ではあったが、武士の精神の中心的関心は死への恐怖を克服することの重要性であった。その練習形式は引き続き進化を遂げていたものの、この要素は武道の理論が織合わされていった。

この意味で、武道の稽古と直接に関連付けられることはほとんど無かったものの、『葉隠』の金言の多くは近代日本における武道において指示されている主要概念に対して興味深い背景を提供している。それらの主要概念の一つが「捨て身」である。これは文字通りわが身を捨てるということであり、精神的にも肉体的にも誰かに全てを捧げるということであり、必要とあらば命をも捧げる。武道において言うと、試合または稽古において結果を度外視して一発に勝負をかけることを指す。本質的に、一つ一つの技を、安全性を無視して自己犠牲の精神で遂行することである。戦の最中に己の命をもものとしめない武士が最も恐ろしい武士であると当時の武士は信じていた。

『葉隠』のいずれのページも日々の生活を送る中で重要となる教訓に富んでいる。例えば、「侍が家を出ると死体の真っ只中で、門をくぐれば敵に会う」という箇所があるが、ここでの論旨は用心することではなく、初っ端から自己を殺すことである(11-133)。すなわち、著者がここで提唱しているのは、侍はいつ殺されてもおかしくないという観念を受け入れなければならないということである。この事実から逃れようとすることは精神面で失格であり、そのようなことでは緊急時に動くことができない。家を出る前に既に自己犠牲を払っていたのであれば、他に恐れるものはない。あるいは、理想的な武士(曲者)は勝ち負けに固執しない。「曲者は何の躊躇も無く死に狂いとなる。この時こそ理解して夢から覚めるのである」(1-55)。この場合、この頑強な侍は勝ち負けという概念から自分を解き放つことで精神的解放を得るのである。そして最終的には好ましい結果を得ようと計算的な他の者たちに勝るのである。

上記の点を説明している箇所で私が気に入っている逸話の一つに、危険な山道を横切ろうとする盲目の僧侶の話がある。かつて、山を通り抜けようとする10人の盲目の僧侶がいた。崖のてっぺんを越えたあたりから脚が震えだし、とてつもなく用心していたものの、恐怖心が勝ってしまった。リーダーはよろめいて端から落ちた。残された者たちはみな“なんと酷い最期だろう!”と叫び、それ以上進めなくなってしまった。落ちた盲目の僧侶は“怖がることはない。落ちることは大したことでなかったし、今は至極落ち着いている。落ちたらどうなるのだろうと心配したため、幾分不安だったが、今では大変冷静だ。心を落ち着けたいのであれば、急いで落ちるべきだ。そしてさっさと済ましてしまうことだ”(10-125)

捨て身は全ての武道において必須の心構えであり、理想的には達人が身も心も委ね、その後の結果を心配することなく完全なる自己犠牲の行為として一撃に全てを賭けることである。なるようになる。この姿勢が戦いにおける究極の目的、つまり、生死への懸念を卓越した心・技・体という最上の組み合わせへの手がかりであった。

今の世の中で弓矢や刀、槍を使って戦う人はいないが、それらの哲学的そして精神的基礎は今でも武道の重要な特性であり、武士のエトスや古戦場との本質的繋がりを維持している。現在では形式はかなり異なるものの、現代武道の世界は、訓練を通して絶えず死と向き合うよう促された侍たちが残した貴重な遺産である。蓄積された彼らの英知は近代の実践者に人生の素晴らしさ、そしていかに個人の可能性を最大限に活かすかという素晴らしい洞察力を、捨て身という逆説を通して与えてくれる。『葉隠』はこの点を素晴らしく論証している。

---

[執筆紹介欄] ニュージーランド・クライストチャーチ出身、2012カンタベリー大学言語文化研究科博士課程・京都大学博士課程修了、  
剣道誌「Kendo World」主宰(世界に発信) 著書「日本人の知らない武士道」「武士道の社会思想的考察」、居合道5段、薙刀5段 他

---

# 「南米チリの剣道を見守りつつ」

元チリ派遣 JICA シニアボランティア  
埼玉大学名誉教授 塩入宏行

厳しい健康チェックと選考試験を突破し、南米にある“ワインの旨い未知の国”チリに JICA シニアボランティアとして派遣されたのが2008年1月。2年間の任期を終えて帰国して丸5年が経つ昨年12月に、第2の故郷とも言うべき彼の地を再訪する機会に恵まれました。

サンチャゴ市内を歩いて、先ず目を奪われたのは、市内のジョギング・サイクリング専用コースの人口密度でした。日本と異なり、走ったり、自転車を夢中で漕いでいるのは圧倒的に若者たちです。この状態は一日中どの時間帯でも同じで、仕事や勉強はいつやるのだろう、と不思議になるくらいでした。

前回訪智の折には、食卓に上るもののすべてに、ふんだんに塩を振りかける、春巻きを食べるときなどは、上1センチほどの所からドボドボと溢れるほど醤油を注ぐ。当然のことながら、中年の高血圧症は、全国民の半分以上。チリの人に健康への配慮はないのかと啞然としたのですが、彼らも健康意識に目覚めたのかもしれない。

さて、本題の剣道について、チリの現状をお話しましょう。剣道人口はほぼ横ばいでしたが、質的に大きな変化が見られました。

その1. 以前はチリ剣道の草分け的存在の通称「道場マタ」、正式名称〈日本剣道智利〉(門下生約70名)と、若手中心の新興勢力、通称「AMK」、正式名〈クラブ・プロヴィデンシア〉(会員数約40名)が、良く言えば、鎬を削る状態、別な見方をすれば、じっくりこない冷戦状態で、お互いの交流を図るのに苦労したのですが、在任中に、オリンピック選手などを育てる国立の施設(CAR: Centro de Alto Rendimiento)を中立地帯として週1回の稽古を続けたこと、年末には30名の両道場対抗戦を企画するなどして融和を図ったことなどが奏功して、少しずつ雪解けが進行したようです。

今回、何より嬉しかったはその「垣根」が感じられないほど交流が密になっていたことです。諸般の事情で前述の CAR は使用できなくなりましたが、第3、第4の勢力として、前会長ニコラス・ディアス5段が始めた〈サンチャゴ武道館〉(剣道・居合道・子ども教室、門下生約30名)、およびブラジルで修業し、チリに移住してきた J-H 郭6段の道場では、サンチャゴ市内だけでなく、ヴィーニャ、テムコなど地方のクラブの剣士が稽古に参加し、韓国人の子どもたちのクラスで指導にも携わっていました。

その2. 私の在任中にはブラジルの世界大会前でも、なかなか定着させられなかったナショナルチームの稽古会が、後任の JICA ボランティア、日巻7段を中心に、週1-2回定期的に行われていることも朗報です。日巻氏は大会までまだ時間があるということで切り返し、大技中心に基本重視の指導をされていました。世界大会に向けて男子は、正統派のステファン、国際武道大学で修業したトマス、ミゲル、ディアスらを中心に、面白いチームになっています。また、小粒ながら、ラテンアメリカ大会でブラジルを破り優勝して経験もある女子にも、初めての予選突破に期待がかかります。

その3. テムコ、コンセプションなどの地方都市の復権。剣道人口でも、選手層でも圧倒的にサンチャゴが中心であることは変わりないのですが、以前は細々と稽古をしていたこれらのクラブが若手の指導者を核にまとまりを見せ、ナショナルチームにも選手を送り込めるだけの力をつけたことは、チリの剣道界を活気づける要素となると考えられます。ただ、以前は各種大会・講習会などを企画して精力的に活動していたヴィーニャのクラブがトップの留学で活動停止に近い状態にあること、同じく南の拠点の一つだったプエルトモンも危機的状況にあり、テコ入れが必要で不安材料でしょう。

その4. 居合道は、数の上で目立って変化は見られません。しかしブラジルから定期的に指導者を迎えて講習を重ねるなど努力の成果が現れ、着実に力をつけています。きちんとした指導を受けながら数を重ねてきたことで、自信が付いたからでしょうか、とくに間の取り方が変わっていました。

注目すべきは杖道(写真)で、毎年カナダの講習に参加して日本の高段位の先生方から直接指導を受けている Dr. ヴェルガス3段をトップによくまとまり、定期的に稽古する愛好者は20名を超すに至りました。技術的には、仕杖の引落打の手応えが全くの別物になっていました。5年前に初めて手解きをした数人の杖の威力がいずれも、現在の自分を上回っていると感じたことが、帰国直後の成田から上田花代子先生に電話で再入門をお願いする直接の切っ掛けになりました。次に彼らと対峙するときには、自信をもって指導できるようなるため、毎週土曜日の羽生の稽古に、〈50回通うこと〉を当面の目標として修行したいと思います。



Seminario y exámenes de Ter kyu - Jodo 10-11 de Enero 2015  
Santiago de Chile

以上のように、3道の普及が順調に進んでいることが、1月10・11日に南米で初めての3道講習会・審査会(剣道5段まで、居合道初段、杖道1級)にブラジル、アルゼンチン、ウルグアイなど近隣諸国から多数の参加者を集め、成功をもたらしたものと考えられ、喜ばしい限りです。何とかチリだけで自前の段級審査ができるようになって欲しいとの夢が実現するのもそんなに遠いことではないように感じました。

## 加盟団体紹介 (その⑧)

### 杉戸地区剣道連盟 - 心身練磨 - 生涯剣道をめざして

会長：関根 剛 事務局：松山 和夫



#### 1 連盟の経過

当連盟は、昭和40年代の初めに関根幸左衛門先生、野本春日先生、中村利道先生を中心に結成されました。杉戸農業高校、百間中学校、須賀中学校に剣道部が作られ剣道人口が徐々に増えてきました。昭和40年代後半には、宮代剣友会、須賀剣友会、杉戸少年剣友会が活動を始め、現在は宮代剣友会、須賀剣友会、杉戸西剣友会、杉戸泉剣友会、杉戸警察署剣道教室の5つの少年剣友会が活動しています。

昭和50年代に入ると居合道の稽古会が関根幸左衛門先生、染谷敏明先生を中心に始まり、現在の宮代高校剣道場での定期稽古に至っています。

昭和62年12月には、杉戸支部規約の改定を行い、組織の活性化を図りました。歴代支部長（現会長）は初代関根幸左衛門、2代内田三郎、3代田中昭大、4代櫻中正志と続き、平成27年度からは5代関根剛会長へと引き継がれました。

#### 2 連盟の現況

当連盟は、傘下5剣友会と中体連所属の中学校剣道部生徒、一般会員から構成されています。少子高齢化の影響をまともに受け、少年剣道人口減少、会員の高齢化といった多くの連盟と同じ状況になっています。

そのような状況の中で、各少年剣友会は危機感を共有し、幼児剣道教室の開催や、会員の親が口コミによる新規加入会員を行い、少年剣道の会員数はやや増加に転じてきました。併せて、練習回数を週3回に増やした結果少年会員の實力も確実に向上し、2006年第28回全国スポーツ少年団剣道交流大会では宮代剣友会の会員が中学生男子個人戦で3位入賞、2012年には第34回全国スポーツ少年団剣道交流大会の団体に同じく宮代剣友会が埼玉県代表として参加しました。

杉戸・宮代両町の人口を併せても8万に満たない弱小連盟ではありますが、毎年のように6、7段が誕生しています。毎週土曜日宮代高校剣道場での19時からの稽古では基本を中心に昇段審査に向けた稽古を楽しく行い、さらに日曜日17時からは同じ会場で若手だけの稽古会も行っています。確実に若い世代の剣道愛好家も増えてきました。

今後も心身練磨・交剣知愛をテーマに、生涯剣道に向け精進してまいりたいと思います。

### 飯能地区剣道連盟 『上に習い・下に学ぶ』

会長：藤牧 守芳 事務局：小川 由雄



1 【沿革】戦後、GHQにより禁止されていた剣道でしたが復活の兆しがあるや、時代を先取りし剣道に情熱を燃やしつつあった剣士に呼び掛け、茂木光雄先生が中心となり昭和27年5月、会長：町田右之亮氏、副会長：茂木光雄氏・梨木三六氏、会計：桑島一氏と各先生方により飯能剣友会が創立された。そして、昭和28年埼玉県剣道連盟の発足と同時に飯能・日高・名栗を併せて飯能支部となる。歴代会長初代：茂木光雄・二代：藤牧利雄・三代：行平鹿太郎・四代：時田潤・五代：藤牧進・六代：藤牧守芳の各先生方が就任。平成24年には創立60周年を迎え歴史ある日本の文化でもある剣道を後世に伝えるべく、日々様々な事業を実施している。

2 【活動状況】①飯能・日高剣道祭：小中学生・高校生の試合、高段者による模範稽古、日本剣道形・居合等演武を披露し今年で40回を数えた。②級審査会：毎年6月・12月実施。③青少年剣道練成会：級審査実施日の午前中、受審者を対象に基本稽古、木刀による剣道基本技稽古法、日本剣道形の講習会を実施している。④初心者剣道教室：剣道の普及・人口増加の為、ここ数年特に力を入れている行事である。平成26年度は飯能市18回、日高市10回開催。飯能市では過去10数名の参加者であったが、市内全小中学校にチラシを配布し30名まで参加者を増やした。日高市では毎年60名を超える申込があり地域では人気講習になっている。他に、毎月1回会員対象の稽古会を実施していたが、子供から成人までの稽古会に変え、市内中学校剣道部の生徒も参加して頂き充実した稽古会になっている。また、平成11年から総会終了後に「剣道を愛好する者同士が、日頃の稽古の成果を発揮し、自らを振り返る機会」として立合いを実施している。

3 【今後の抱負】子供から大人まで、広く剣道に親しみ、剣道を生涯に渡り自己研鑽の方法として活用してもらえよう努力していく。会員が一丸となり剣道普及の為、指導を通して『上に習い・下に学ぶ』という気持ちで成長し、正しい剣道『人間形成の道』を伝えていきたい。

## 北本市剣道連盟 一同心協力

会長：山中 完悟 事務局長：吉田 潤



**1. 沿革** 本連盟は、埼玉県剣道連盟鴻巣支部傘下として、昭和48年北本市市制施行と同じくして設立をみ、剣道の普及と技術の向上に努め朝鍛夕錬稽古に励み、昭和57年埼玉県剣道連盟北本支部として承認され今日に至っております。〈初代会長 諏訪義忠・二代 早川啓記・三代 岡野 正・四代 諏訪勝二郎・五代 青葉元由紀・27年4月より六代 山中完悟〜〉。特に発足当時より、当地に本山を置く宗教法人解脱会の支援を受けて、その充実をみると共に、昭和51年以来全日本剣道連盟が主催する外国人剣道夏期指導者講習会が解脱会において受け入れられ、今や世界の剣道界では「北本・解脱」を知らないものは無いと云われる程、世界各地への剣道伝播の中心地として注目を集めている。

**2. 活動状況** 小さい連盟ながらも、最高段位である八段、並びに女性七段（現在の女性剣士最高段位）を中心に老若男女、幼年年から青壮年まで広く稽古に励んでいる。その中であって、県内の少年剣道の普及振興に資してきた解脱会主催による埼玉県選抜少年剣道大会が、平成15年から解脱選抜少年剣道鎌成大会と名称も新たに、県内は勿論のこと広く関東の強豪道場を招待して高いレベルでの大会を開催し、県内少年剣道の資質の向上が図られると共に広く関東近県に及ぶ少年剣士の目標大会の一つとなっている。又、北本中学校剣道部においても、平成15年に初の全中出場から昨年まで12回の埼玉県予選で7回決勝に進み、内5回に優勝。埼玉県の代表として全国大会に出場し、併せて支部で学び鍛えられた小中学生が高校・大学・社会人となり、近年、選手として全国高等学校選抜大会優勝・国体準優勝を始め、全国高校総体・全日本学生大会・全日本実業団大会・都道府県対抗埼玉県代表等、目覚ましい活躍を果たしている。今後も少ない会員数ではありますが、剣の道・人の道に精進しつつ、同心協力して次代を担う青少年の健全育成に資していく所存であります。

## 寄居剣道連盟 一歴史と伝統の継承

会長：清水 都留吉 事務局長：宮下 公成



**1. 沿革** 戦後、剣道復活の機運が高まる中、一身上の都合で警視庁を退職し寄居に帰っていた内田清作（第四代会長）は、柴崎要八と相計り、剣道連盟の設立発起人会を樹立すべく、約半年にわたり、寄居町内はもとより、花園村、川本村（現深谷市）に在住する剣道愛好者の宅に赴き、設立準備委員としての協力を要請した。この活動が原動力となり、昭和26年1月15日、当時寄居町長であった岩田周氏（熊谷中学剣道部出身）、寄居警察署長・新原寛氏、寄居警察署剣道嘱託教師・清水茂一郎氏等々のご指導とご援助により、寄居剣道連盟が発足した。歴代支部長は、初代岩田周、二代森田耕一、三代清水義一、四代内田清作、五代浅見薫治、六代柴崎正、七代清水都留吉の各先生が就任されている。

**2. 行事** 本連盟主催の行事として、寄居地方武道大会（剣道の部）を開催している。第1回武道大会は、会場を県指定名勝の玉淀河原で開催した。県連盟から小沢丘、鈴木淳蔵、梅沢照佳、間中鹿太郎、諸貫五三郎、時田好三、川田徳覚、清水茂一郎、清水武一、倉持光憲、内田和助、酒井塩太、新井一夫、黒沢利輔、渋沢平吉、また、群馬から五十嵐、白石、等々の諸先生のご出席をいただき、輝かしく記念すべき大会となった。この大会も、平成26年度で60回を数え、当地方における武道の振興発展に寄与している。また、当初は寄居町が有する国指定史跡「鉢形城」の歴史や伝統文化の継承を目的に開催されている「鉢形城まつり」において、武者行列への参加や、河原などで合戦を模した紅白戦などを行っていたが、昭和50年頃から剣道大会の開催を行ってきた。この祭りも、年々盛況さを増し、平成7年度から町や町観光協会等も含めた実行委員会の主催となり、名称も「寄居北條まつり」と改められたが、剣道大会は往時のまま、高点試合（勝ち抜き戦）で続けられている。

**3. 今後の抱負** 本連盟は剣道を奨励振興して、剣道精神の涵養に資するとともに、郷土の剛健なる気風の醸成を図り、併せて会員並びに関係者相互の親睦を図ることを目的に活動を行っている。諸先生方により培われたこれまでの伝統を継承し、時代を担う青少年の育成と本連盟の発展に努めていく所存です。

**あとがき** 第16回世界剣道選手権大会が東京で開催されましたが、大会の前後で県内でもあちこちで交流稽古会がもたれた様子を聞き喜ばしい限りです。剣風も第8号となりました。ご寄稿等に感謝しつつ、更なる内容の発展充実にも努めますのでご協力をお願いいたします。（池田）